瀬名全景　平成６年撮影

せいりょうざん　　こうきょういん

清涼山　光鏡院

〒420-0911静岡市瀬名１丁目３８番３６号
TEL 054-261-2669　FAX 054-261-2864

本尊　文殊菩薩
室町時代後期作

開基位牌

せいりょうざん
山号　清涼山

こうきょういん
寺号　光鏡院

そうとうしゅう
宗派　曹洞宗

もんじゅぼさつ
本尊　文殊菩薩

えうんようりん
開山　慧雲用輪大和尚

いまがわむつのかみ かずひで
開基　今川陸奥守一秀公
初代瀬名氏

こうきょういんでんつざんしゅうこう だいこじ
戒名　光鏡院殿実山秀公大居士

光鏡院全景　平成１０年撮影

縁起（沿革）

光鏡院は山号を「清涼山」といい、曹洞宗に属し、永平寺、総持寺が大本山で、本寺は静岡市小坂安養寺である。本尊は文殊菩薩をお祀りしている。

開基について「寺記」は、長亨2年(1488)今川貞世の後裔・源五郎陸奥守一秀が開いたとある。戒名を光鏡院殿実山秀公大居士（文亀三年四月二十日(1503)没）という。

開山は慧運用輪大和尚で、安養寺二世の法子、天正16年(1588)に入寂したが、光鏡院の礎を築いた僧である。

その後、永禄11年(1568)武田氏の駿河攻略の際兵火にかかって一時ほとんど廃滅した。寛文2年(1662)に、三世鶻仙暾俊大和尚によって、諸堂再建の道が開かれ興隆を見ることが出来た。それによって中興の開山と称されている。当院は五百有余年と継がれ現在に至っている。

山　門

まず最初に仰ぎ見るのが山門です。この山門は開基今川一秀公五百回忌を記念し、檀信徒の寄進により、平成6年（1994）より、五百回忌供養塔、位牌堂改修工事、境内整備そして、山門建立と進められて、平成9年（1997）10月25日山門落慶、五百回忌の法要が勤められた。

この山門は、総欅造り、本葺き瓦屋根、四脚門で正面左右に仁王像、後面に風神雷神が納められている。

山号額は鐵相書であるが、年代等不詳である。また、智慧門の額は愛媛県瑞応寺楢崎一光老師（元永平寺副貫首）の書で、当院本尊文殊菩薩にちなみ掲げてある。

芭蕉の句碑

山門をくぐり階段右側に芭蕉の句碑がある。雪門の流れを汲む村の俳人達が、寛政10年(1798)に建てたものである。

世にさかる花にも念仏申しけり　はせを

芭蕉句碑

裏面に

三経の洩れくる里や春の風	古柳
御仏をきざむ僧あり桜蔭	大雅
鶯や声の光も百由旬	大弐
遠近に春の夜しらぬ桜かな	柳枝

その句碑の右側に、三世露々堂玉川秋翠翁の句碑が、昭和30年（1955）に建てられ、既に苔むし初めた自然石の碑面を見れば、

石あれば避けて流れぬ春の水

とあり、如何にも呼応して謳歌する春のにおいを想わせている。

秋翠句碑

五百回忌供養塔

芭蕉の句碑の階段上に、五百回忌記念事業として、平成９年（1997）開基今川陸奥守一秀公の供養塔が建立された。

本　堂

階段を上りきると正面に本堂がそびえ立っている。本堂は間口8間半、奥行き8間の禅宗伽藍である。永禄11年(1568)武田氏の駿河攻略の際兵火にかかって諸堂は廃滅したが、建物が再建された明確な年代がわかっていない。ただ、元和元年(1615)入寂した三世鶻仙暾俊大和尚の事蹟に、「法地開闢・中興の祖」とあるから、慶長の頃であろうと思われる。その後、修理改造してきたが、昭和2年(1927)の大修繕によって今日の本堂の外観を見せている。

本堂内の須彌壇中央に本尊「文殊菩薩」像（室町時代後期作）、左に達磨大師、右に 大権修理菩薩が安置されている。

達磨大師、文殊菩薩、 大権修理菩薩

又別に、ここに遷座されている秋葉大権現像がある。本堂向かい正面の山を秋葉山といって胞衣墓地があった。そこに小祠があって祀られていた。宝暦7年(1757)願主中川林右ヱ門の厨子の裏書きがある。西出口札場の辻が入り口で、今もその常夜燈が残っている。小祠と像が風雨で傷みが激しかったため解体され、像は修理修復され、本堂内に安置されている。

秋葉大権現

開山堂兼位牌堂

本堂に続く裏手に、開山堂兼位牌堂（明治時代）があり、御開山、歴住和尚牌、開基牌と檀信徒の位牌が祀られている。正面にはもと禅堂にあった釈迦像が移され祀られている。

庫　裡

本堂の東側の庫裏も古いたたずまいを見せていたが、昭和18年(1943)に草屋根を瓦葺きに改造したものの老朽老朽化ひどく、昭和39年(1964)に竣工したものである。また新庫裡は平成8年（1996）に竣工されたものである。

三十三観音　本堂の西側にの塀の中に三十三観音が修められている。この三十三観音は、現在開基供養塔のあるところに観音堂があった。その場所は門前石段正面に在って、僅か六坪程の建物だったが、中には三十三番の観音石像が三段に並べられていた。この堂は、もと藤巻家の屋敷にあった。石像の刻銘によると、先祖が元禄４年(1692)に心月智清大姉供養のために立て、再び亨保20年(1735)に建て替えた。その後、天明4年(1784)に仏像もろ共炎上し、それがため天明4年6年(1786) 新たに石像を造って祀った。このお堂が最初寺内へ移されたのは、この時で、現在山門がある場所で、再度、前に記した観音堂のあった所に移されている。それは明治25年(1892)）であった。年を経て堂も腐朽し昭和37年(1962)に又も、禅堂跡の石垣添いに配列安置されたわけである。

開基供養塔・歴住墓所　本堂裏手に墓地があるがその中腹に、歴住和尚の墓所がある。また開基今川一秀公の墓所があったが、現在は２５０回忌の供養塔のみが残っている。

２５０回忌の供養塔

歴住墓所

山門前から望む永代供養塔

本堂裏山から望む

新墓地・３３観音墓苑

光鏡院開基今川一秀について

瀬名/堀越氏　丸に二つ引両（清和源氏今川氏一族）

駿河の守護で戦国大名としても著名な今川氏の祖は、足利義氏の二男有氏の子国氏とされ、国氏は伯父長氏の養子となった。『尊卑分脈』によれば、養父長氏の三河吉良・今川両荘などのうち、今川荘内の数郷を伝領して、今川太郎、あるいは今川四郎と称したという。

やがて、鎌倉幕府が倒れて建武の新政が始まると、北条時行による中先代の乱が起こった。今川基氏の子五人のうち、僧になっていた四男と足利尊氏に直属していた五男範国を除く三人が、足利党として奮戦して戦死している。長男頼国は、遠江小夜中山の合戦で北条中先代軍の将北条邦時を討ち取る大功をたてたが、直後の相模川渡河戦で戦死、このとき三男頼周も戦死したのであった。

その後、範国が駿河・遠江両国の守護に任ぜられ、頼国の遺児頼貞が因幡・但馬・丹後三国の守護に任ぜられたのも、中先代の乱における今川三兄弟の戦死という抜群の働きにたいして尊氏があつく報いたものだろう。

南北朝内乱が始まると、範国は足利党として、京都合戦、駿河手越河原、美濃青野ケ原、河内四條畷等などの諸合戦に出陣。観応の擾乱には直義側にあったが、まもなく尊氏に帰順して活躍したので、やがて室町幕府の引付頭人に任ぜられている。このため、範国はほとんど京都に在住していた。この間、領国支配を実際に担っていたのは嫡男の範氏であった。範氏は駿遠両国における領国支配を確立するために駿河南朝方をはじめ、両国における反対勢力の駆逐排除と、今川勢力の在地扶植に努めたのである。この意味において、駿河今川氏の基礎を築き上げたのは、範氏であったといえるかも知れない。

しかし、範氏は、業なかばにして父範国に先んじて死去した。そして、範氏のあとを継いだ嫡男氏家も祖父範国に先だって死んだのである。氏家は死に臨んで、従弟の今川貞臣に家督と駿河守護職を譲ろうとした。氏家には子がなく、弟は僧になっていたからである。しかし、貞臣の父今川貞世はこれを固辞した。そして、僧であった弟が還俗して泰範を名乗り家督を継いだのであった。この泰範の系統が、いわゆる駿河今川氏となる。

●今川了俊

ところで我が子の家督嗣立を固辞した貞世は、直後に上洛した。京都にいた父範国から幕府の引付頭人の要職を譲られ、続いて侍所頭人も兼任することとなったのである。こうして、範国がもっていた駿河守護としての側面は、泰範に、幕府重臣としての側面は今川貞世に受け継がれることになった。このとき、今川氏の二系分流がなったといえよう。

貞世はその後出家して今川了俊と名乗った。ところで、義満が三代将軍に嗣立したとき、まだ十歳でしかなかった。義詮は、幼い義満を補佐させるため九州探題であった細川頼之を呼び戻し、頼之を幕府の管領に任じた。しかし、この時期の九州における南北朝の内乱は、頼之の長年の努力で北朝方が優勢であったが、征西将軍懐良親王を擁した菊池一族の反撃も、まだまだ無視できない上京であった。

この困難な九州探題職に任ぜられたのが、今川了俊だったのである。以後、了俊は九州各地を転戦し、その職にあること二十五年間、所在の九州南党の諸勢と戦い続けた。やがて、九州は了俊の努力で平定されるかに見え、中央でも南北朝内乱は収束に向かっていった。ところが、突如了俊は九州探題職を解任され、京都に呼び戻された。これは、周防・長門・豊前・筑前などを守護領国にした大内義弘が幕閣に了俊を讒言したためであるという。

いずれにしても、これによって了俊は不遇をかこつことになった。その後、嫌疑は解けなかったものの、かつての軍功に対して遠江国内に河井郷・堀越郷・中村郷・湊郷・瀬名郷の五郷を与えられ堀越郷内に住した。かれの活躍に対して、報いられたものはあまりに少なかったといえよう。

こうして、了俊は遠江今川氏の初代となったものの、直後に堀越姓を名乗り、九十六歳の長寿で死去した。

●了俊の後裔－瀬名氏

晩年の了俊の心中にあった幕府に対する憤りは、代々の子孫にも受け継がれてゆき、やがて曾孫範将の代で爆発した。長禄三年（1459）八月、遠江守護斯波氏に内紛が起こったのを好機として、周辺の土豪たちを招き集めて、中遠一揆と称される叛乱を慣行したのである。

しかし、この種の動きをするには時期尚早であった。一揆軍は粉砕され、範将は敗死した。そして、堀越流今川氏が領していた遠江五郷は、幕府に没収されて将軍家直轄領の御料所にされてしまったと、『親元日記』に記されている。しかし、その子貞延のときに、返付されたらしい。

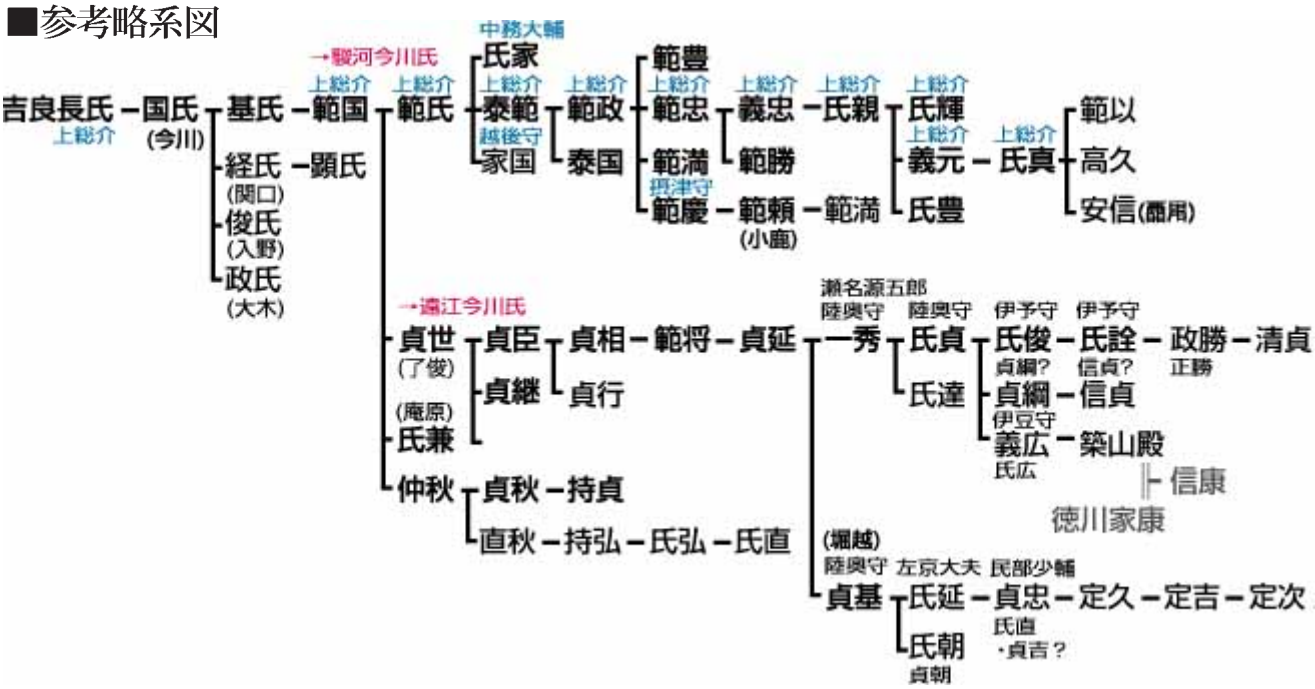
貞延の長男一秀は、はじめ遠江堀越の海蔵寺の喝食で**義秀と称していたが、父貞延の戦死により、還俗して一秀を名乗った**。また、一秀は二俣城を守っていたが、文明８年（1476）２月遠江の横地四郎兵衛、勝間田主理亮らが今川氏にそむいたので、守護大名六代今川義忠はこれを攻めて降しました。ところが帰途「塩買坂」（小笠町）で残党に逆襲され戦死してしまった。今川義忠が遠江塩賀坂で不慮の死をとげるや駿府に移り、幼主竜王丸（のちの氏親）を補佐し、竜王丸の家督相続が確定すると、その功によって瀬名を与えられ、瀬名殿とよばれた。（一説には、義忠死後、瀬名に入ったともいう）瀬名に移り城砦を築いて居住、光鏡院を開いた。

以後、瀬名氏は今川氏に属して重臣に列した。桶狭間の合戦のとき、瀬名氏俊は先手侍大将であたが、織田信長の奇襲で今川氏が壊滅し、その後没落するや浪人となった。そして孫の政勝のとき家康に仕え、小牧・長久手の戦いに出陣して功を挙げ三百石を与えられた。のち加恩を受けて五百石となり、代々徳川旗本として続いた。

今川義元の馬印として有名な「赤鳥」は長年、何を表わしたものか、不明であった。それを、寛政年中旗本高木家から、これは貴家に置くこそふさわしいと瀬名家に贈られた。これによって、赤鳥に対する疑案が氷解したと『日本紋章学』に紹介されている。結局、「赤鳥」は馬の「垢取り」の変え字であった。以後、瀬名家の旗印として伝えられた。

ところで、一秀の孫義広は関口氏を名乗った。その娘が徳川家康の室となった築山殿で、家康との間に嫡子信康をもうけた。そして、その後の悲劇はよく知られているところである。また、一秀の弟貞基は堀越郷を領して、堀越姓を継いだ。子孫は今川氏の重臣となり、今川氏没落後、家康に仕えて瀬名氏と同じく徳川旗本として続いた。

■参考略系図



梵鐘について

大小の梵鐘が鋳造され、五世陽山益春大和尚の代には、在住諸堂は整備完成し、元禄年間（1690頃）には小梵鐘、江尻住山田氏忠作とあった。もう一つの大梵鐘とは、七世天外穏長大和尚の時、宝暦５年（1755）には、１９０キロに余る大梵鐘を総檀信徒の喜捨によって成就したが、ついに鐘楼の建立は持ち越しとなって、本堂前に吊りさげられ、時鐘としても村民に親しまれたと聞いている。また、大正４年（1915）には大工山本安蔵が鐘楼の絵図面も設計していたが、これもまた実現には到らなかった。（本堂内に掲げてある）　このように大小二つの梵鐘は、昭和17年（1942）の末、戦争拡大と共に、供出を余儀なくされ、逐にその姿は失なわれてしまった。

禅堂について

昭和37年（1962）に取り毀わされた禅堂は、雲水の道場として、本堂の西南隅にあって、明治初年までその役目を果たして来たが、その後使われることもないまま放置されていたが、昭和１８年（1943）に、国土防衛軍部隊の駐屯によって、中の造作は取り潰され、、戦後は荒廃に任せ物置代わりになっていた。この建立は寛政元己酉年（1789）９月で九世住持の時である。もと檀徒で沼上の大安寺に転じた片井三右ヱ門の寄進されたものと伝えている。

昔の境内について

昔の参道は、明治初年頃まで杉桧の大木が群立して空を蔽い昼も小暗かった。樹木はそこだけでなく、伽藍の周囲や墓地までも埋めていたと聞くが、私の覚えている景色もその幾らかが残されていた。参道の名残は今も、石段脇に二三本の杉がそれを物語っている。
この杉に相対して左側角に二た抱えもある桜の枯木が、昭和30年（1955）頃まで立っていたが、その昔、桜の季節樹下に佇ずむ芭蕉の句碑を、散る花の香りに包んでいた頃の風情を忍べば懐かしまれる。

昭和25年（1950）代の全景

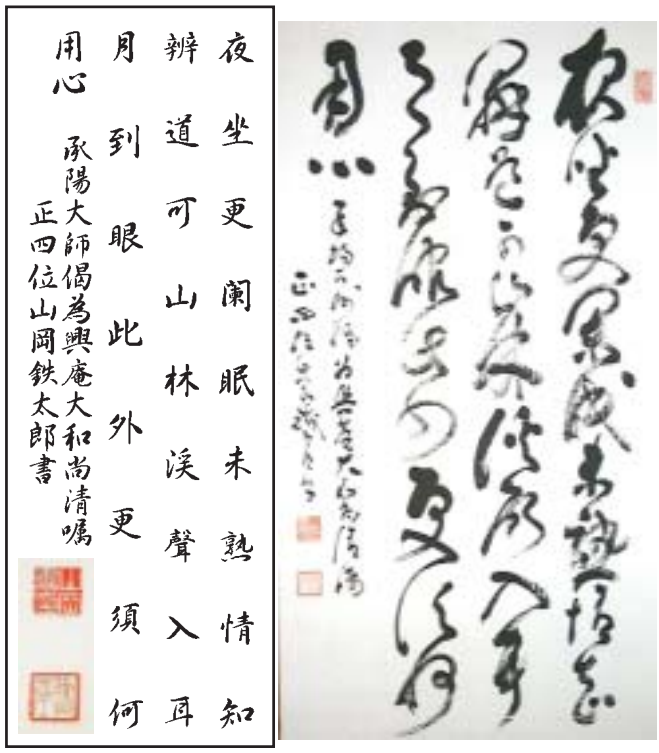
その他の建物について

経蔵は、般若経六百巻の収蔵庫で、もとここに納めらていたが今は本堂に移されている。この経蔵は五世益春大和尚の代に築造された土蔵で、昔は街中からも白壁の夕日に輝く景色が見え、人々に親しまれたものである。

寺　宝　紹　介

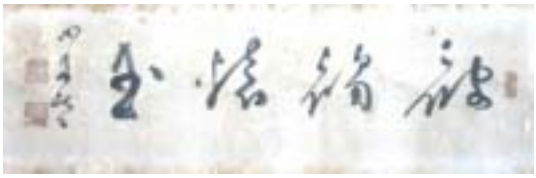
掛軸　狩野牧松筆墨絵
文殊菩薩像

涅槃図（江戸後期）



掛軸　山岡鐵舟書
天保7（1836））～明治21（1888）

円頓観心十法界之図
江戸後期



額装　勝海舟書
文政6(1823）～明治32（1899)